
鍵

沢上澪羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鍵

【Zコード】

Z6549H

【作者名】

沢上澪羽

【あらすじ】

部屋の片づけをしていた香乃は、使わなくなつた鞄の中から、小さな鍵を見つける。それはかつての恋人、雅行のものだつた。やつと彼との日々を忘れかけていた香乃に、その鍵は昔の日々を思い起こさせる。そして、香乃は決して開けてはいけない扉を開いてしまう……。

(前書き)

性的な表現も少々含まれています。
苦手な方は「」注意ください。

それは、使わなくなつていた鞄のポケットの中にあつた。
それは、香乃の掌の上で、冷たく硬い質感を持つて存在感を示し、
鈍く光つてゐる。

「これ……」

人差し指と親指でつまむようにして、香乃はその小さな鍵を田の高さまで上げて、しげしげと見つめた。

その鍵には、見覚えがある。

「・・・雅行・・・」

苦々しく呟いて、香乃はその鍵を部屋の片隅に投げつけた。鍵は『力チリ』と硬い音を立てて、壁にぶつかって落ちた。

「何だつて今更こんなものが」

香乃の脳裏に、雅行との日々が浮かび上がつては消えていく。
望まれて付き合つて、2年ほど付き合つてから香乃の方から別れを切り出した。

あの鍵は、付き合つていたころに雅行から渡された、彼の部屋のものに他ならなかつた。

本当ならば、別れた時に返すべきものだつたのだろうけれど、あの鍵は未だに香乃のバックの奥底のほうに、隠れるよつにしてひつそりと香乃のそばにいたのだった。

なんだかずつと雅行が自分の近くにいたようなそんな錯覚をして、香乃は思わず身震いをした。

部屋の片づけをしようと思つて、色々なものを引っ張り出していたら、とんでもないものを見つけてしまつた。

もう片付けの気分でもなくて、香乃は広げてあつたほかのバックや小物類を、強引にクローゼットに押し込むと、ペットボトルのお茶を一口飲んだ。

いつもよりもお茶が苦いような気がして、思わず顔をしかめる。勢いよくソファーに座ると、その視線はさつき投げつけた鍵に向かってしまった。

鍵は静かに床に落ちていた。

ただ、そこに存在しているだけ。

なのになぜか、香乃の視線はそこに吸い寄せられてしまう。

そして、雅行とのことが思い出されるのだった。

彼は医者だった。

馴れ初めは、雅行の一目惚れだ。

医療事務をしていた香乃は、顔は好みではないけれど、『医者』と言つ職業を持つた雅行にアプローチされるのは悪い気はしなかつた。それに、自分の彼氏が医者だなんて、まるで自分のステータスさえ上がるような気がして、すぐに付き合いだしたのだった。

最初のうちはそれなりに楽しかった。

けれど、雅行は香乃を縛りつけようとしたのだ。

香乃の時間は全て自分の時間でなければ気がすまないようにな、香乃を縛り付けた雅行。

若い香乃にはそんな束縛が耐えられなかつた。

もともと好きという感情よりも、医者と付き合つていていた香乃にとって、雅行の束縛は甘くて愚かな思いから目を覚まさせるのに十分すぎるものだつた。

何度も別れようと思いつながら、別れてしまつてからの人になる寂しさを考えると、なかなか別れられないまま、香乃は2年と言つ時間を雅行と過ごした。

雅行が結婚をほのめかすようになつてきて、香乃はやつと決心して

彼に別れを告げたのだ。

それで終わつていれば、こんなにも悪い思い出にならないで済んだのに・・・と、香乃是ため息をついた。

部屋の片隅に投げ捨てた鍵を拾い上げて、テーブルの上に置く。いつまでも部屋の片隅に放つておくわけにもいかない。

「どうしよう・・・

と、途方に暮れたように香乃是呟く。

もう雅行と別れてから2年近く経つていた。

雅行からの連絡が途絶えて1年。やつと忘れることができたと言つのに、今更出てくるなんて、なんて皮肉だらう。

いつそのこと、ほかの「ミ」と一緒に捨ててしまおうか？

そう思つてみたものの、もともとは自分のものではない鍵。もしかしたらまだ雅行はある部屋に住んでいるのかもしれない。それならば、やはり「ミ」として出してしまるのはまずいような気がした。それでは誰にも拾われないよう、川にでも捨ててしまおうか？

・・・ズキリ。

そう思つたときに激しい頭痛に襲われて、香乃是首を振る。何かが頭の中で引っかかったような気がしたが、その考えは形を成さずに消えていった。

『ピンポーン』

チャイムが鳴り、香乃が玄関に向かう前に、ガチャリと鍵が外側から開かれ、長身の男が入ってきた。

「健一」

香乃は嬉しそうな声を上げて、部屋に入ってきた男に抱きつく。さつきまで雅行とのことを思い出して、もやもやとした胸の中が一瞬にして樂になつていぐ。

「どうしたんだ？香乃。そんなふうに飛びついてくるなんて、珍しいな」

健一が香乃の頭を優しくなでる。

「ううん。なんでもないの。健一に会いたかったんだ」

「香乃……」

いつもと違う香乃の様子に触発されたかのように、健一がその体を抱きしめながら、長いキスをする。

「んん……健一」

香乃是雅行のことを自分の中から追い出したくて、いつもよりも健一が欲しいと思う。

その思いに答えるかのように、健一はソファーに香乃を押し倒した。健一の足が、テーブルにぶつかり、その拍子にテーブルの上から鍵が転がり落ち、床の上で硬い、警告音のような音を立てる。香乃はびっくりと体を硬くして、視線を床に落とす。鍵はソファーのすぐそばに転がつていた。

「香乃……？」

体を硬くした香乃に気が付いて、健一が声をかける。香乃是視線を床に落として、青い顔をしていた。

「どうした？」

「ごめん。何でもないの」

香乃是体を起こすと、曖昧に笑つた。

背中に一筋汗が流れる。まるで鍵に見張られているような気がして、これ以上健一を求めることもできない。

「ねえ、健一。ずっと一緒にいてね？」

潤んだ瞳で見上げてくる香乃を健一が抱きしめる。

「本当にどうしたんだよ、今日は。大丈夫だよ……」

「約束よ？」

「ああ、約束」

香乃は力いっぱい、不安を振り払つように健一にしがみついた。

・・・早くどうにかしなくつちゃ・・・。

香乃は床に転がっている鍵を横目に、強く思った。

この鍵は雅行の部屋の鍵であり、私を縛り付ける鎖の鍵のようなものでもあった。

香乃は重い足を引きずるように歩きながら、そう思った。

その鍵をもらつたとき、初めて男の人の部屋の鍵をもらつたことに、香乃は単純に嬉しいと思っていた。

けれど、その鍵をもらつてから、雅行の束縛は更にエスカレートしたのだ。

香乃が休みのときは、その鍵を使って雅行の部屋で彼の帰りを待たなければならなかつたし、友達と出かけても、その帰りにその鍵を使って彼の部屋に行かなければならなかつた。

逆らうこともできたのだろうが、香乃が逆らうと、彼は殴つたりしないものの、何度も何度も香乃に言い聞かせるように自分の主張の正当性を語つた。

「でも」とか「だけど」とか香乃が言つても、雅行は絶対に主張を変えず、香乃が理解するまで彼女を解放しなかつた。

そして、一切香乃の主張は認めない。まるで呪文のように自分の主張を繰り返すのだ。

それは香乃から反論する気力を奪つくらいに・・・そうして香乃是心理的にも雅行に縛られていたのだった。

嫌なことを思い出して、香乃は眉を寄せショルダーバッグをぎゅっとつかんだ。

そのバッグの小さなポケットの中に、あの鍵が入っている。重い足取りで向かった先には、もう一度と来ることはないと思つて、いた雅行のマンションがあった。

マンションを見上げ、決心したように雅行の部屋を指す。鍵は、持ち主である雅行に返すべきだと思つた。

平日の日中ならば、仕事に行つているはずだから、ぱつたり顔を合わせることもないだろう。

『鍵は持ち主に返すべき』

確かにそう思つているのも事実ではあったものの、香乃は捨ててしまふのでは自分の良心が痛むような気がして、本人に返そうと思つたに過ぎない。

自分の罪悪感から逃れるために、今更鍵を返される雅行のことなど思つ余裕さえもなかつた。

それに、今更雅行のことなど思つやる必要などないとわざ思つた。

あれだけ私を苦しめたのだから、別に思つやる必要もない。と。

携帯電話を見ると、数十件の着信。そのどれもが雅行からのものだつた。

別れて数日後から、それは始まつた。

雅行と別れるのと時を同じくして仕事を辞めていた香乃は、それまで感じたことがないような自由な気持ちで日々、友達と出かけたり、ドライブを楽しんだりしていた。

しかし、それを許さないかのように、雅行から頻繁に着信が入るようになつたのだ。

別れたとはいっても、つい最近まで彼氏だった人間を無視する」ともできず、電話に出ると、

「香乃、やり直そう」

「もう一度いいから会って欲しい」

「帰つてくれ」

そんな言葉がいつも並べられた。

時には、そのころ実家暮らしをしていた香乃の実家のそばまで来て、「迎えに来たから、これから会おう」と電話をしてきたりした。

着信を無視すると、香乃が電話に出るまで着信はやまない。

身の危険を感じた香乃は、家から出られなくなってしまった。

何度も「やり直す気はない」「もう会えない」と言つても、雅行は理解しない。

時には香乃の言葉に逆上して、雅行から電話を切つてしまつこともあつたが、数分後には何事もなかつたかのように猫なで声で電話をよこす。

たとえ香乃の言い分を理解したかのように「分かった。もう電話しない」と言つても、忘れたかのように、数日後には電話が鳴つた。友達が送り迎えをしてくれるので久しぶりに夜出かけたときなど、「男と一緒にいるなんて許さない」と電話があり、怖くなつて帰つたこともある。

着信拒否などしたら、本当に実家まで来てしまつのではないかと思うと、着信拒否することもできない。

しかも、時々カーテンの隙間から外を見ると、香乃の部屋の様子を伺うような影が見られるようになつた。

散々、メールでいやらしい言葉や暴言をぶつけられる。

警察に相談しようか・・・、本気でそう思つていた。そんなときに出会つたのが健一だつた。

健一は事情を知つてそばにいてくれ、何度もかかつてくる雅行からの電話にその都度出ると、「香乃は俺と付き合つてゐるから、もういい加減にしてくれ」と雅行に何度も言つてくれた。

そうしてこらへうちに、雅行からの連絡は途絶えていったのだった。それから健一と付き合つようになつた香乃は、一人暮らしを始めることもできのだ。

あのころのことを考えると、吐き気さえ覚える。

別れてもなお、香乃を縛ろうと必死だつた雅行。

そうされればそうされるほどに、香乃の気持ちは間逆の方に行つてしまつとも分からず。

間違つことなく、香乃はその部屋までたどり着いた。

そんなに大きな建物ではない。すぐに雅行の部屋は見つけられる。表札にはまだ雅行の苗字がかけられていて、まだそこに彼が住んでいるのだということを香乃に知らせていく。

そつとドアに近づいて、香乃は部屋の中をうかがう。

部屋の中には人の気配はなく、留守であることが分かつた。バックに手を突っ込み、鍵を取り出す。

素早く郵便受けの中にその手を入れ、鍵を落とせば全てが終わり・。のはずだった。

それは小さな好奇心。

手の中には鍵。目の前には手の中の鍵で開くドア。

香乃は郵便受けに入れかけた手をゆっくりと引き抜くと、手を開いて掌の上の鍵と鍵穴を交互に見る。

本当にほんの小さな好奇心。

香乃は鍵を鍵穴に刺すと、ゆっくりと回す。鍵は『かちやん』と何の抵抗もなく開いた音がした。

自分でそうしたにも拘らず、香乃は酷く驚いた様子で、もう鍵のかつていないうちを見つめた。

それから、ドアノブを回す。ドアノブは『ビバヤ』とでも言つよつて、すんなりと回つてそのドアを開けた。

開けてからも、香乃は戸惑つ。

帰つたほうがいいと警告する血ちの声と、入つてしまえといつ血ちの声、その一つがせめき合ひ、好奇心とこの血のスペースを加えられた分、後者の方が勝つてしまつた。

一時は付き合い、別れた後はまるでストーカーのように自分に執着した男が、今どんな生活をしているのかほんの少しだけ覗いてみたい・・・そんな思いが警告を続ける自分の声を搔き消してしまつのに、時間はかからなかつた。

「ちょっと覗いてみるだけなら・・・」

わざと声に出して香乃は、鍵を握り締めてドアの中に体を滑り込ませる。

音も立てずに香乃の後ろでドアが閉まつた。

後ろめたあと、好奇心の入り混じつた気持ちで急いで靴を脱ぎ、居間へと続くドアを開ける。

ドアを開けた途端、湿気に混じつた埃とカビのようないい、それから確かにこの部屋で嗅いだことのある、懐かしい匂いが香乃に纏わりついてきた。

部屋の中をぐるりと見渡し、香乃は思わず顔をしかめる。

部屋の中は、それは酷い有様だつた。

テーブルの上には、ビールの缶やコンビニ弁当の袋を容器が積み上げられ、崩れてしまつたものが床に転がつてゐる。

食べ残しの弁当さえも床にこぼれたままになつており、いつからそうされているのか、それが元々は何だったのかも分からなくなつてしまつていた。

なんだか酸素が薄いような気がして、香乃は思わず咳き込んだ。

やはり、好奇心なんて起こすべきじやなかつた。

そう思つたとき、鍵が手の中からこぼれ落ち、居間と寝室を隔てるアコードィオンカーテンの隙間へと転がつていつた。

香乃是慌てて、鍵を拾うためにアコードィオンカーテンに手をかけ、そつと開く。

そして、見たのだ。異様な部屋を。

「・・・なに・・・これ・・・」

香乃是力が抜けたようにその場にへたりと座り込んだ。

その寝室には、写真がびっしりと貼られてあつた。

「どうして・・・！」

友達とレストランにいる香乃。

自宅のベランダに洗濯物を干している香乃。

健一と歩いている香乃。

買い物をしている香乃。

全て香乃。

香乃の写真が壁一面に貼られていた。

それは引き伸ばされたものはポスターほどの大きさもある。

大小の香乃の写真が、何の秩序もなく、ただ闇雲にとでも言つた風に貼られているのだった。

いつ撮られたのかも分からぬ写真。雅行は別れてからもずっと香乃の側に間違ひなくいたのだ。

その他にも、香乃が忘れていつたハンカチやCD、飲みかけのコーヒー、いつか使つた割り箸、この部屋で使つていた歯ブラシ、なくしたと思っていた櫛・・・様々な物が、日付を書いたと思われるラベルが貼られ、ひとつひとつジッパーの付いた袋に入れられて棚の中に納まっている。

香乃是体の芯からぶるぶると震えるのを感じながらも、それら全てのものから目が離せない。

写真に何かこびりついた痕を見つけ、それが何を意味するのか思い当たつた時、香乃是余りのおぞましさに吐き気を覚え、握り拳を強く口元に押しつけた。

香乃の脳裏に、香乃の写真に向かって、白濁液を何度も吐き出し射精する雅行の姿が浮かぶ。

それは確かに香乃の想像でしかなかつたが、香乃は自分の想像が間違つてはいないと確信していた。

「狂つてゐる

香乃は震える声で呟く。

けたたましくサイレンを鳴らすよつこ、本能が早くこの部屋から出るよう警告する。

香乃自身、もう一時もこの部屋には留まりたくなどなかつた。一瞬でも早く出ていきたいのに、手や足からはずつかり血の気が引いてしまつてうまく動かない。

今更後悔しても遅いことを知りながらも、香乃は自分勝手な好奇心でこの部屋に入つたことを激しく後悔した。

震える指をやつと動かし、さつと落としてしまつた鍵を、なんとか探し当てた。

手の中に冷たい鍵の感触を確かめながら、香乃はこの鍵はどこか入目に付かない場所に捨てるべきだと思った。

そう、やはり川かどこかに・・・。

ズキリ。

また頭が痛む。

ふつと、なにかの光景が頭の中をよぎつた。

自分が橋の上から何かを川に向かつて投げている。

きらきら光りながら落ちていくそれは・・・。

・・・そう・・・私は、鍵を捨てた・・・別れてすぐに・・・。

じゃあ、この手の中の鍵はいつたい何・・・?

「おかえり」

その声に、香乃是全身から血の気が引いて、体が冷たくなるのを感じた。

恐ろしくて振り向くこともできない。

背後から再び声が聞こえる。

「おかえり、香乃。ずっと待っていたんだよ」

「雅・・・行・・・」

やつと声を撞り出し、首だけ動かして後ろを見る。

少しの気配も感じさせず、雅行は香乃のすぐ後ろに立っていた。

「帰りが遅いから、心配したじゃないか」

後ろから抱きすぐめられ、香乃是全身に鳥肌が立つ。体を無理やりに動かして、雅行の腕から逃れた。

「やめて！！」

雅行は、無表情に香乃を見ている。その瞳には、何の光もない。

「帰ってきたんだろ？香乃」

「ち、違う・・・！鍵を・・・この鍵を返そつと思つて・・・」

香乃是震えながら、鍵を握り締めた拳を雅行の方に突き出す。

「ああ」香乃の言葉に、雅行は片方の頬を痙攣させるようにして笑つた。「招待状を持ってくれたんだね」

「招待状？」

引き攀るよつに笑う雅行の顔から目を背けながら、香乃是訊ねた。

手の中にあるのは鍵。招待状など受け取つた覚えはない。

「そうだよ。香乃、なかなか帰つてきてくれないから、招待状を出したんだ。ずっと一緒に約束したじゃないか。その約束を思

い出してくれたんだろう？」

香乃の手の中の鍵が、急に冷たくて硬い質感を失う。

その感触は徐々に柔らかく、そして濡れたような感覚を伝えてきた。

一 指切りした小指、受け取ってくれたんだね」と

ほ
た
り

金石打一いかでの事なり作がる事ある
ぱたり、ぱたり・・・。

事の上には呻み声で泣かれていたが、ようはぐち、ぐち、はぐれされ、血塗れになつた人間の小指があつた。

畜万が悲鳴を叫ながら掌に手を打つ。手を握り落とす。手と掌をめちゃくちゃに振ると、さつきまで硬い鍵だったそれは、鈍

雅行は引き攣つた顔のままで、またましハモどの笑ハ歎を上げて

「悪い出してくれたんだろ？ 香乃！ ！」

近寄つてくる雅行に向かつて、手元にあるものを手当たり次第に投げつける。

クッション、空のペットボトル、何かの薬の容器、空き缶……と

雅行は避けることもせずに、にたにたと笑つたまま、ひるむことなく、香乃に近づいてくる。

ふと、香乃の手は何か重たいものに触れる。

それが何かも詰詰しないまま、さくらの隣で迷って立っている雅行に向かってそれを振り降ろした。

鈍く重たい音がして、雅行はぐらりと揺れた。

香乃は改めて自分の持っていたものを見て「ひつ」と、声にならない声を上げ、血と肉片と髪の毛の付着した灰皿を投げ捨てた。着ていた服にも、血が点々と赤黒い染みを作っている。

「・・・痛いなあ・・・」

雅行の頭部は、明らかに陥没し、そこからだらだらと血が流れている。

香乃は首を振りながら後退し、どうにかその場を立ち去りつとした。
「逃がさないよ・・・香乃。お前は俺のものなんだ・・・」
逃げようとする香乃の足を雅行が掴む。その手は氷のように冷たい。
この部屋から逃げ出そうと思っていたものの、雅行に足を掴まれて、
玄関の方に行くことができない。とにかく足を掴んでいる手を振り
ほどくようにして足をばたつかせ、一瞬雅行の力が緩んだ隙にシャ
ワールームの扉に滑り込んだ。

「かあーーのあーーー。お前は、俺のものだあーーー」

神経に障るような、甲高い声で雅行はげらげらと笑っている。

「嫌よ。冗談じゃないわ・・・！」

香乃は最初のドアに鍵をかけ、更にシャワールームに入り、その
鍵もかける。

震える手で携帯電話と取り出すと、警察に連絡しようと番号を押す
が、指が震えていてうまくいかない。

とにかく警察に連絡して、助けてもらうしかないと思った。
自分も不法侵入とか、傷害とかの罪に問われるかもしけないが、雅
行から逃げられるのであればたいしたことではないような気さえし
た。

もう部屋の中からは、何の音も聞こえない。

まるで、雅行も全て消えてしまったかのよう・・・。

はあはあと荒い息を整えながら、何度も田にやつと1-1-0を押すこ
とに成功する。

「ホール音をこねぼじもどかしい」とはなこくらこく、香乃は誰かにつながるのを祈るようになに待つた。

ぱちやり・・・

水音にはつとする。

視線の端に、浴槽。

浴槽の中に・・・なにか。

がちゃりと携帯が香乃の手の中から滑り落ちる。

その音は、密閉された浴室に響いた。

「もしもし、もしもし？」

携帯電話から、香乃が祈るように待っていた誰かの声が聞こえたけれど、香乃にはその声に応えることができない。

ただ、あまりの光景に体からすっかり力が抜けてしまっている。

震えるばかりで声も出なかつた。

ぱちやり・・・ぱちやん

それは浴槽の中から立ち上がる。

半分溶けかけ、所々骨が見えるモノ。

多分、かつて雅行だつたモノ・・・。

「力・・・ノ・・・」

真つ黒な空洞のような口腔から、そんな声が聞こえた気がした。
けれど、ただ空気が漏れただけで、声と呼べるものではない。

「う・・・あ・・・」

香乃は目を見開いた。

見たくもないのに、ソレから目が離せない。

体の細胞全でが目の前の存在を拒絶しているのに、目だけはソレを見る
ことを義務付けられたかのように釘付けにされている。
かつて雅行だつたモノは、ゆっくりと浴槽から立ち上がつた。
にたりと笑つたような気がしたが、表情など読み取れるわけもない。
頬の肉は溶け、頬骨が覗き、目があつた場所はただの黒い穴ぼこになつて
いるのだから。

するり。

浴槽から出てきたソレは、上半身だけで、腰から下は浴槽の中に転
がつてている。
千切れた腹部から、紐のような内臓がぶら下がつていた。
ばぢやり。

ソレが動くたびに、肉片が飛び散り、異様な音と臭いとを撒き散ら
す。
内臓を引き摺りながら、びぢや、びぢや、と香乃に近寄つてくる。
もうすでに、正気を保つことができない。

「あ・・・はは・・あは・・・」

香乃は涙を流しながら笑つた。

だらしなく緩んだ口元からは、涎が流れている。

「力・・・ノ・・・」

再びそんなふうに空気が揺れ、目の前にソレが迫る。

一瞬、ソレは現実の出来事を認知することをやめた香乃の目に、かつての雅行の姿で映った。

雅行

香乃はソレに向かつて、かつて付き合っていた頃のようにその名を優しく呼んだ。

それから 顔を歪ませて 顔中の筋肉を痙攣させた

声を出したつもりだったが、実際それは声にならなかった。かつて雅行だったモノの舌が、香乃の喉を塞いでしまっている。苦しさのあまり、香乃は胸を掻き鳩る。

血かにしみ、自分の爪で柔らかな胸の肉を削ぎ落とす。暗くなつていく視界の中で、香乃が最後に見たのはにたりと笑つたような、かつては雅行だったモノ・・・。

どこかで『かちやり』と鍵の閉まる音が聞こえた。
そして、香乃のすべては闇に閉ざされていった。

「そう。健一君の彼女さんって亡くなつたんだ・・・」
聞いてしまつたことをすまなそつに、女は曖昧に笑つた。

「いいんだ。変な死に方だつたんだ」

「変な?」

聞かれて、健一は遠い目をする。

香乃はかつての恋人だつた雅行の部屋で、変死体となつて発見された。

最後の電話を不審に思つた警察官が、見つけたのだった。
ただ、香乃の死因には不可解なことばかりで、警察も首を傾げるしかなかつた。

雅行の部屋から見つかった死体は一体。香乃と、雅行。
けれど、雅行はすでに死後半年は経過していた。多分自然死だらう
ということだつたが、損傷が激しく原因の特定にはいたらなかつた。
通帳から家賃は引き落とされていたし、仕事ももう一年も前にクビ
になつていたので、誰も不審には思わなかつたのだ。
その死後半年近く経過した死体の下に、香乃の死体があつた。

死因は窒息死。

喉には雅行の肉片が詰まつていたといつ。

その死に顔は・・・安らかとは言い難いものだつた。

何があつたのかはもう、誰にも分からない。

暫くの間塞ぎこんでいた健一も、そろそろ忘れるという周りの声に
促されるように、今日飲み会に参加したのだった。

目の前で健一を見つめる女を見る。

そう、もう香乃のことは忘れるべきなんだろう。

健一は女に向かつて笑顔を見せた。

香乃の部屋の鍵。

ポケットの中に違和感を感じて、健一はそっと手を入れた。

「どうしたの？」

「ん？いや・・・」

手の中には小さな鍵。

・・・ズット、イッショニイマシヨウネ・・・。

・・・ケンイチ・・・。

・・・。

風が呼んだような気がした。

・・・ケンイチ・・・。

(後書き)

最後まで読んでいただきまして、本当にありがとうございました。
初ホラーということで、かなり難しかったです。

読んでくださった方に、ほんの少しでも『ゾクリ』という感覚を持つ
つていただけたなら、この上ない幸せです。

ずっと参加したいと思っていた企画に、やっと参加することができ、
できはどうあれ、ホラーとは全く似つかわしくない、爽やかな達成
感を感じております。

これから他の方々の作品も拝見して、勉強させていただきたいなあ、
と思っています。

最後になりますが、何か一言でもいただけると本当に励みになります
ので、どんなことでもいいので一言残して頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6549h/>

鍵

2010年10月8日22時51分発行